

# 人とのかわりを通して 国際教育がめざす個人の態度・能力を育てる授業のあり方について

国際理解教育研究会議

研究員 小川 辰夫（川崎市立東門前小学校） 関 恵美（川崎市立稗原小学校）  
竹内 右子（川崎市立御幸中学校） 鳴海 麻衣子（川崎市立はるひ野中学校）  
指導主事 佐藤 公孝

## I 主題設定の理由

今日は、国や社会の間を情報や人材が行き交い、相互に複雑にむすびつく中で、全世界が持続可能な発展を遂げるために、地球温暖化や地域紛争・高齢化社会といった課題に協力して対応することが求められる時代である。また、個人においても、自己と他者、社会と対話を重ね、共生していく力が求められる時代でもある。学校の教育課程においても、これまで以上に国際的な通用性が強く意識されるようになってきている。平成 20 年 3 月に告示された学習指導要領の「生きる力」は、このような社会において子どもたちに必要となる力が示された。

一方、新学習指導要領の移行期における学校での国際教育の実践はどうだろうか。新しく始まる小学校外国語活動のねらいにも国際教育がめざす態度・能力が示されたといえる。しかし、川崎市が長年実践を積み重ねてきた「共生」や「多文化」をねらいとした実践、すなわち、単に外国のことを知るだけでなく、個人の中にも文化があること、身近な生活の中にも多文化があること、それぞれが相互依存関係の中で支え合っていること、文化や相互依存関係は常に変化していることなどを、生活のつながりの中から気づき、考える実践が少なくなっているように感じる。

本研究では、新学習指導要領の「生きる力」の趣旨を受け、国際教育でめざす個人の態度・能力を整理する。そして、国際教育を実践する時に、どのような視点をもって単元を考え、どのような学びを評価していけばよいかを研究するために、本主題を設定した。

## II 研究の内容

### 1 研究の内容

- (1) 海外子女教育、帰国児童生徒教育、外国人児童生徒教育、国際理解教育を有機的に連携させ、初等中等教育における国際教育の在り方について、その基本的な方向性を示した平成 17 年度「初等中等教育における国際教育推進検討会報告～国際社会を生きる人材を育成するために～」における国際教育の定義と 3 つの目標をもとに、新しい国際教育目標構造図を作成する。
- (2) 国際教育目標構造図（平成 13 年度国際理解教育研究会議作成）の態度・能力と新学習指導要領の教科等における①ねらい（態度・能力）②学習内容③協同的な学習等の関係を整理する。
- (3) 単元づくりのために、①国際教育と児童生徒の実態（意識・生活でのつながり）②学習内容③協同的な学習活動④児童生徒の気づき・考え・行動の 4 つの視点もとに単元を開発し検証する。

## II 国際教育目標構造図

### 1 国際教育の定義と 3 つの目標

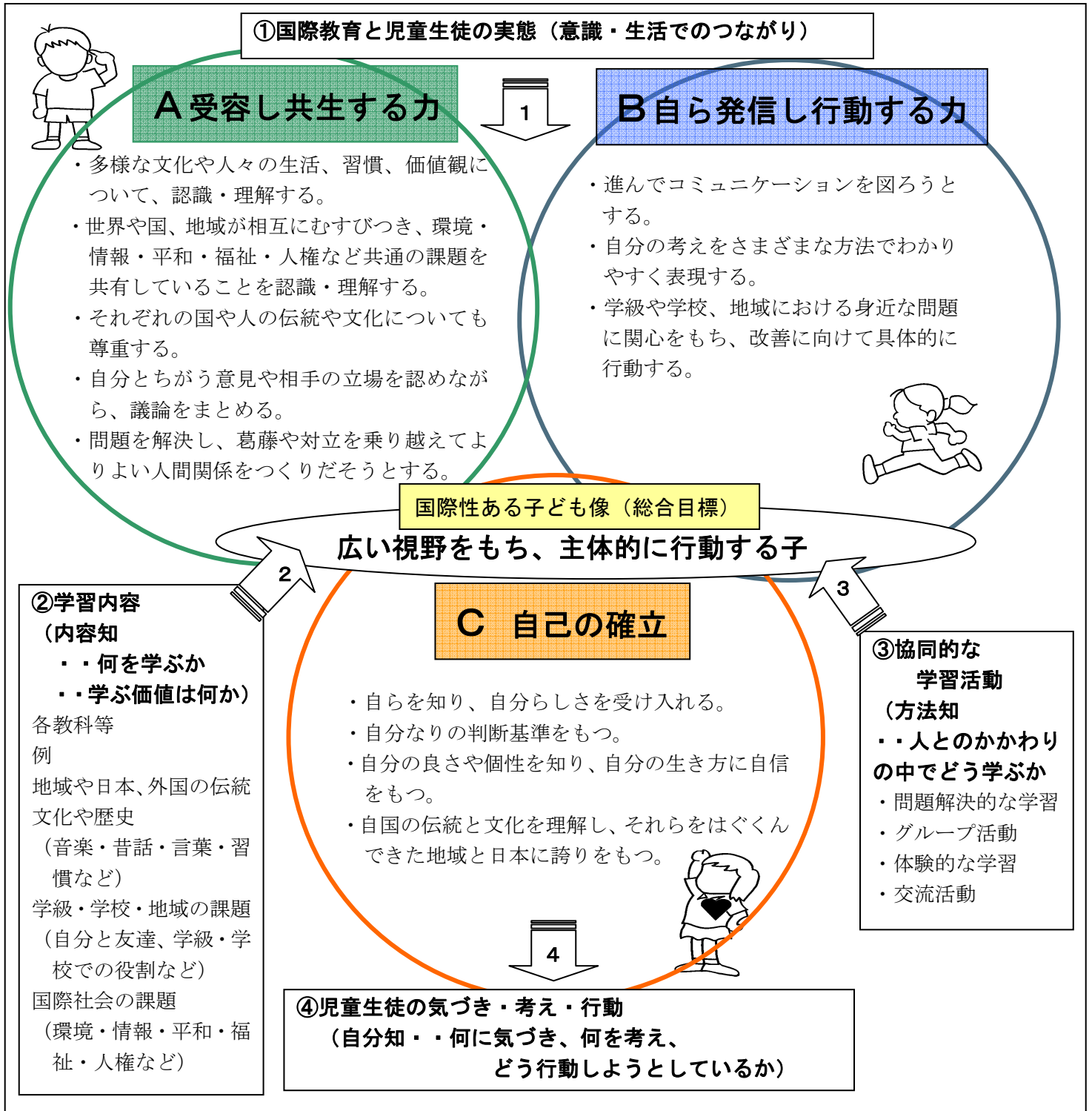
国際教育：国際化した社会で、地球的視野に立って、主体的に行動するために必要な態度・能力の基礎を育成する教育

目標

- A 異文化や異文化をもつ人々を受容し共生する力
- B 自らの考えや意見を発信し、具体的に行動する力
- C 自らの国の伝統・文化に根ざした自己の確立

（平成 17 年度 文部科学省「初等中等教育における国際教育推進検討会報告」）

## 2 国際教育目標構造図



## Ⅲ 研究の実際（検証授業）

### 1 A小学校 第6学年 総合的な学習の時間

#### 「川崎大師再発見」～地域の歴史に目を向けよう～

(1) 国際教育目標構造図に沿った単元の考え方

#### ①国際教育と児童生徒の実態

朝の会で行う「最近気になるニュース」のスピーチ（例えば冬季五輪の関連記事など…）を通して次第に海外へと目が向き始めていることがわかる。また、友達とは進んでコミュニケーションをとり、集団行動なども上手に行うことができる。

## ②学習内容

川崎大師は、初詣の時には全国各地から参拝客が訪れる有名な寺院である。子どもたちは、地域にある川崎大師に幼い頃から親しんできている。小学校に入学してからは、地域巡りの学習で訪れたり、表参道のくずもち工場に見学に行ったり、多学年にわたり様々な学習を体験している。また、校歌の中にも「平間寺」という言葉が登場するなど、子どもたちにとっては身近な存在といえる場所である。しかし、このような学習を経験してきたが、川崎大師の歴史や川崎大師に対する地域の方の思いをどれだけ知っているかという、あまり知らない実態がある。そこで、歴史を学んでいる6年生に、川崎大師という地域の歴史に目を向けさせ、再認識する学習を行うことが有意義であると考えた。

## ③協同的な学習活動

今回の学習では協同的な学習活動として、グループごとのフィールドワークを取り入れた。課題別グループを作り、何度か川崎大師に足を運び調べ学習を行う。また、川崎大師ボランティアガイドの方々から直接話を聞く活動を取り入れ、川崎大師ボランティアガイドの方々の思いを感じ取ってほしいと考えた。

## ④児童の気づき・考え・行動

- ・川崎大師の良さやすばらしさに気づき、自分たちの住む地域に、誇りや愛情を感じる。

### (2) 単元目標

- ・地域にあり、幼い頃から親しんできた川崎大師の歴史を進んで調べようとする。
- ・川崎大師について調べていく中で、川崎大師についての理解を深め、地域に誇りをもつことができる。(A) (C)
- ・調べたことが効果的に伝えられるように工夫をし、表現することができる。(B)

注：(A)は受容し共生する力、(B)は自ら発信し行動する力、(C)は自己の確立の態度・能力につながる単元目標を示す。

### (3) 指導計画と実践

時	学 習 内 容	学 習 活 動
1	オリエンテーション 活動への動機づけ	川崎大師を中心とした今までの学習を想起する。 (地域探検、くずもち見学、川崎大師スケッチ…)
2	課題づくり	川崎大師について知っていることや調べてみたいことを整理して課題づくりをしていく。
3		
4	課題決定	課題として選んだことが適切かどうかよく考え、課題を決定していく。
5		
6	調査方法の確認	川崎大師ボランティアガイドの方に話を聞きに行く、お店の人に話を聞く、川崎大師にある表示を読むなど。
7~11	調査活動	課題別グループに分かれて調査活動をする。 川崎大師ボランティアガイドの方に話を聞きに行く。 ひとつの課題が解決したら関連した次の課題を考えさらに調べ学習をしていく。 (例) 大山門の4体の像→京都の東寺の4体の像 課題設定→調べ学習→課題解決→新たな課題→調べ学習→課題解決…というようにスパイラル的に学習が広がり、深まっていくように学習全体を捉えていく。
12~18	発表準備	調べたことが効果的に伝えられるように、発表方法を工夫する。発表原稿を作って読み上げるのではなく、聞いている人に語りかけるような発表を心がける。パソコンを使ったプレゼン形式での発表を取り入れ、聞いている人によりわかりやすく、理解しやすい発表になるように工夫する。

19～20	発表会	調べたことが効果的に伝えられるように工夫して発表する。調べたことを発表し感想交流をすることで、川崎大師についての認識や理解を深め、自分たちの住む地域に誇りをもつ。日本のほかの地方や外国の文化や伝統についての認識や理解につなげていく。
21	活動の振り返り	調べ学習・発表会・感想交流を通して感じたことや考えたことを話し合い、今までの活動を振り返る。

#### (4) 実践を終えて

今回の学習を終えてまず感じたことは、子どもたちの認識の変化である。「川崎大師はお正月にたくさん人の集まるにぎやかなお寺と思っていたが、昔からいろいろなことがあり、歴史を刻んでいることがわかった。」「自分が生まれるずっと前からあって、いろいろな試練を乗り越えながらここまできているんだな。」など歴史的な背景を知り、川崎大師にもっていた見方が変わり、より親しみと敬いの気持ちが大きくなった様子があった。また、「私たちの住む地域は一生のほこり、宝物です。」という感想もあり、自分の住むこの地域に対する見方や考え方も変わった様子があった。

さらに、授業の中でボランティアガイドの方が「川崎大師の学習から京都につながり、中国やインドにつながっていくんですね。」と話された。授業ではその言葉の意味を話し合うことはできなかったが、このような言葉を起点に、その意味を考えていくことが、学習に広がりや深まりを生むために重要であった。このような言葉を起点にして、子どもたちの気づきや考えを揺さぶり、新しい課題を設定してさらに調べていく学習が必要であったと考える。

## 2 B中学校 第1学年 総合的な学習の時間

### 「日本の中の異文化に目をむけよう…ともに生きる」

#### (1) 国際教育目標構造図に沿った単元の考え方

##### ①国際教育と児童生徒の実態

本校の中学1年生のうち9割の生徒が昨年度小学部で開発教育を中心に国際理解の授業を体験している。そのために、海外への出来事に関心がある生徒が増えてきた。

##### ②学習内容

総合的な学習の時間では、「国際理解」を軸に小学部からの連携を図っている。中学段階では視点を国内に向け変化する社会の中で多様な価値観や背景をもった人々が、社会の中でどう生きていくかを考える学習展開を考えている。横浜校外学習を通じて港（＝いろいろな文化との接点、窓口、出発点、帰着点、交流点、融合場所）から出発する人々、入ってくる人々という視点からニューカマーとオールドカマーに関しての理解を深める。身近な「違い」から自分を見つめ、自己の確立への気づきを促す学習活動を行う。

##### ③協同的な学習活動

川崎市に住むブラジル系移民の方、在日コリアンの方を講師として招き、自分たちの生活のつながりから普段気づかなかった視点からの話を聞き、自分の考えを深める。その後「日本の中の異文化」をテーマに調べ学習、レポート作成を行い、意見文を作成しクラス内で発表し聞き合う。まとめとして、クラス代表数名を提案者として学年発表を行い、提案者たちによるテーマをもとにグループ討議を行う。

##### ④生徒の気づき・考え・行動

- ・身近な社会に住む人々との関わりを通じて、自分自身の身近な社会に多くの視点で暮らしている人々がいることに気づく。
- ・「異なる」「違う」ことによる葛藤や衝突が日常生活の中でも日々起こりうることに気づく。
- ・「異なる」「違う」ことはマイナスではないという基本的態度をもち、自分の良さ、人の良さを認

めようとする。

(2) 単元目標

- ・横浜校外学習や日系ブラジル人・在日コリアン講師の話を通じて、身近な外国や港からつながる人々や文化との関わりを知り、自分を取り巻く社会の中の多様な背景のある人々について理解しようとするができる。(A)
- ・自分の課題に対して、情報メディアを利用し自ら情報を収集・整理してレポートや意見文にまとめることができる。(B)
- ・調べ学習や意見文作りを通じて、他者と自分との「違い」を受け入れる寛容な態度をもちながら話し合い活動で生徒同士の建設的な意見交換ができる。(A) (B)

(3) 指導計画と実践

	学 習 内 容	学 習 活 動
1	オリエンテーション 「港からつながる人々」	6月の横浜校外学習をふまえて「港」から出発し異国に渡った移民について知る。生徒による紙芝居と寸劇
2	講演会①	現代の日系移民の子供たちの現状についての理解を深める。 (日系ブラジル人日本語指導等協力者による講演)
3	「ニューカマーの子供たち」	
4	講演会②	主にオールドカマーの歴史的背景や取り巻く日本社会の状況について理解を深める。(ふれあい館職員による講演)
5	「オールドカマーについて」	
6	各自調べレポートを作ろう。	移民や異文化背景のある人々についての学びを活かして自分の探求したいテーマの設定。
7～10	「日本の中の異文化」という テーマで調べ学習	各自のテーマにそって調べよう。 図書室・コンピュータ室・インタビュー・アンケートなど
11	意見文個人トピックの決定	各グループの調べてきた内容について簡単に発表を行い進行状況を報告する。
12～14	原稿推敲&作成	各個人が「人ごと」ではなく「自分の関わる世界」の問題として「違い」をテーマに原稿を作成する。
15～17	意見文クラス内発表	自分のテーマで書いた弁論について発表し、クラスの仲間の発表を聞こう。
18～19	学年意見交換会 (各クラスから3～4名ずつ)	学年の代表弁論を聞き考えよう。 代表生徒による発表・提案→グループ話し合い活動→画用紙を見せながら班ごとの発表を行う→クラスで振り返り
20	学習のまとめ	「違い」に遭遇したときいかに受容し共生していくかに重点をおいて今後の生活でどう活かせるかを意見交換する。

(4) 実践を終えて

2回の講演会を通して、生徒たちは、日本社会、身近な地域でも異なる文化的背景をもった人々が様々な思いで過ごしていることを積極的に理解しようとしていた。また、何か自分にはできないかという感想や意見を述べる生徒もいた。さらに、人種差別などの問題に多くの生徒が関心をもちインターネットなどを使って主にアメリカや日本の状況を調べている生徒も多く見られた。このように実際に目で見て、耳で聞いて感じた人の「思い」によって自分の心の中に変容が起きて行動を起こすことができたと考える。

学年の意見発表会では「日本の中の異文化」をテーマに外国から入ってきた様々な文化が日本に根付いていることを発見することに繋がった。さらに、生徒による提案を受けて、「違う」ということによる対立が起きた時に、どう対応していくかについて班ごとで話し合いを進めることができた。その中で身近なクラスや仲間という小集団の中でも衝突の起きた際には、「話し合うこと」「意見を伝えること」場面によっては「ゆずり認めること」の大切さについて述べられていた。多くの意見を取り入れ「新しいものを生み出すこと」の重要性について気づいたグループもあり、これらの学習での認識

の変化を普段の学校生活に生かしていこうという雰囲気ですべての学習を終えることができた。このような認識や理解の変化をもとに、目標構造図の（B）自ら発信し行動する力に示された学級や学校、地域における身近な問題に関心を持ち、改善に向けて具体的に行動するためには、一つの単元だけでなく、年間を通じた取組を通して認識・理解のレベルから行動のレベルに育てていく必要があります、その学びのプロセスを追っていきける実践が必要であると考えます。

#### IV 研究の成果と今後の課題

平成 17 年度「初等中等教育における国際教育推進検討会報告」をもとに、国際教育目標構造図（平成 13 年度国際理解教育研究会議作成）と新学習指導要領の関係を整理して、新しい国際教育目標構造図を作成することができた。また、国際教育の実践を考える時、①国際教育と児童生徒の実態②学習内容③協同的な学習活動④児童生徒の気づき・考え・行動の 4 つの視点もとに単元づくりを進めるプロセスを提案することができた。しかし、単元を考え、検証授業を通して次の 4 つの課題が生じた。

- ① 総合的な学習の時間で検証した単元が新学習指導要領で示された探究的な学習として十分に成立しているか。
- ② 新しく提案した国際教育目標構造図が単元づくりを進める際に、活用しやすいものであるか。
- ③ （A）受容し共生する力、（B）自ら発信し行動する力、（C）自己の確立を単元目標にする際、評価できる妥当な目標になっているか。
- ④ 国際教育で育てる態度・能力の特性を考えた時、年間を通じた継続的な取組（学級づくり、朝の会、ホームルーム等）が必要ではないか。

この 4 つの課題を解決するために、平成 22 年度も国際教育研究会議を設置する。そして、単に検証授業を重ねるだけでなく、学校で国際教育の実践を考える時、国際教育目標構造図をもとに、より具体的に国際教育の育てる態度・能力を示し、単元づくりを進める際のプロセスがわかる手引きの作成を進めていきたいと考える。

最後に、本研究を進めるに当たり、適切なご助言をいただいた先生方、研究をご支援していただいた研究員所属の校長先生ならびに教職員の皆様に心からお礼申しあげます。

#### 【参考文献】

- |   |           |        |
|---|-----------|--------|
| 佐藤郡衛『改訂新訂 国際化と教育』                       | 放送大学教育振興会 | 2003 年 |
| 御手洗 昭治『多文化共生時代のコミュニケーション力』              | ゆまに書房     | 2004 年 |
| 佐藤郡衛・吉谷武志編『ひとを分けるもの つなぐもの—異文化間教育からの挑戦—』 | ナカニシヤ出版   | 2005 年 |
| 佐藤郡衛・佐藤裕之編『共に生きる子どもを育てる国際理解教育』          | 教育出版      | 2006 年 |
| 『国際理解教育実践事例集 中学校・高等学校編』                 | 文部科学省委嘱研究 | 2008 年 |

#### 【指導助言者】

東京学芸大学 国際教育センター 教授（川崎市総合教育センター専門員） 佐藤 郡衛